栞集を読む

松岡　隆子

夫の忌の夜は容赦なき戻り寒　　矢作　裕子

同時句に〈まづ春の雪掃く夫の三回忌〉がある。もう三回忌とは――、二年前のあの日の事を思い出す。昼過ぎだったろうか、所用があって矢作さんに電話を掛けた。「はい、矢作です」といつもの元気な声が返って来た。その前後の会話は記憶にないが、「今朝主人が亡くなりました」という声だけは今も耳に残っている。その朝突然倒れられ還らぬ人となられたと聞いて絶句した。

矢作さんは山形の寒河江市に住んでおられる。三月の寒さは戻り寒というより寒が居座っているような寒さであろう。〈容赦なき〉の吐露に計り知れない心の痛みをおもう。

紅梅や日向に増ゆる人の声　　醍醐喜美枝

梅と言えば白梅、その清楚で気品のある風情は古来より人々を魅了してきた。一方、紅梅は艶やかで美しく白梅とは違った魅力がある。満開になったばかりの紅梅の瑞々しい紅さは青空に映えてひときわ美しい。一人二人と寄ってきては紅梅を見上げる。早春の風が頬にやさしい。日向に増える人声もやさしい。紅梅ならではの心静かな観梅風景である。

立春大吉流水で顔洗ふ　　宮崎美智子

立春といえども春は名のみで、まだ水も冷たい。だが、今日から春、と思うと心が弾む。迸る水を打ちつけるようにして顔を洗う。冷たさが快い。〈立春大吉〉の季語の斡旋が好い。凜とした心の張りが一句に投影されている。

宮崎さんは二月の本部例会に初参加され、互選高得点を得られた。「ビギナーズラックです」と謙虚にお辞儀された。

病状を切り出す間合シクラメン　　河本　順

病気なのは身内の方だろうか。見舞いに来てくれた人と暫くとりとめのない会話を交わす。病状を説明したいのだが話の切っ掛けがつかめない。相手は深刻に思って単刀直入に聞き出せないでいるのかもしれない。そんな微妙な情況を見事に俳句に詠み込んでいる。徒な想像は避けて、明るい展開を信じたい。窓辺のシクラメンが明るい。

伏す草の流れのかたち冬河原　　高野　達子

大雨が止んで川はいつもの流れを取り戻した。よく見ると河原の草がみな倒れ伏している。〈流れのかたち〉とは的確な描写だ。河原まで増水した流れの激しさを物語っている。